

FORN

カリフォルニア

土居良一

TEXAS
PEPPER
JAPANESE

BEACH
BETTER



CALIFORNIA

カリフォルニア

土居良一

講談社

RYOICHI DO

カリフォルニア

昭和五十四年二月二十六日 第一刷発行
昭和五十四年三月二十六日 第二刷発行
著者 土居良一

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号一一二
電話東京〇三〇九四五一二三（六代表）／振替東京八一三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 七八〇円

●土居良一

昭和三十年札幌生まれ。札幌市立旭丘高校、米國フレズノ・アダルト・スクールを経て現在無職。第一回群像新人長篇小説賞受賞。

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

© Ryoichi Doi 1979, Printed in Japan

カリ
フ
ォ
ル
ニ
ア

ペラに捧げる

古い教会の鐘が午前十一時を打ちはじめた。その重苦しい陰うつな響きは、ためいきが充満したような白い冬空を流れ、一ブロック離れた焦げ茶色の家の二階にある小部屋の窓ガラスをふるわせた。窓の下で寝ていたケン^{ヒトタビ}は、幾隻もの美しい帆船が見える砂浜でその音を聞きつけ、一度鳴るごとに夢の中からつれ戻されてきた。くそっ！ 彼は両手で顔を覆ったまま鐘が鳴りやむのを待ち、毛布をけとばしてベッドの上にはね起きた。昨夜、エアー・コンディショニングの換気孔をしめ忘れたので部屋の中はむとする熱気につつまれ、空気はカラカラに乾燥していた。ケンは足をのばして換気孔のふたをしめると、ひりひりする喉をさすりながら廊下にでた。すり減

った赤いカーベットの足を滑るように階段のつきあたりまで歩くと、彼は共同冷蔵庫の上に飾られた写真に目をとめた。銀色の額縁の中では、故ケネディ大統領が焦点のない眼差を向け、うつろな微笑をうかべていた。写真自体はかなり古く、まわりが薄茶に変色していたが、右下に「親愛なる友、イーガン氏に」という大統領の自筆と思われる署名がはっきりと残っていた。ケンは眉をひそめてその文字を見つめた。その署名はこの三ヵ月ほど、一階に住んでいる大家のミセス・イーガンと彼との茶飲み論争の主題となってきたものだが、今だに解決されていなかった。ミセス・イーガンが説明する入手経過はひどく断片的なものだったので、彼がいつもの調子で「やっぱりね、どうも信じられないな」と結論を下すと、老婆の方は無然として首をふりながら「そりゃあね、あなたが生まれる前の話だからね、わからないのも無理はないけれど……。でも、とにかくあれは本物なのよ!」といった具合だった。彼はしばらく写真をにらみながら頭の片すみで和解策を検討してみた。が、ごくりと飲み込んだ唾が、また喉の痛みを思い出させた。ケンはあわてて冷蔵庫からコーラのビンを取り出すと、部屋に戻ってベッドに腰掛けた。コーラを流しこむと冷たい炭酸の刺激で痛みは和らいだが、頭の中は昨夜のグラス(マナ)の余韻が残っているようにでしゃきつとした。ケンは首筋をもみながら、さあて音楽でもと思い、何気なく手をのばしてドキッとした。ポータブルラジオも灰皿も週刊誌も、机の上にはなにひとつなかった。彼はハッとしてふりかえり、部屋のすみに重ねられたダンボールの箱を確かめるようにまじまじと見た。間違いはなかった。うっかり忘れていた楽しい計画を思いだし、ケンは笑いながらベッドに

ひっくり返った。おれも本当にどうかしてるよ！ 彼は今日限りで、このベッドから、この部屋から、この古い家から、このS通り界限から姿を消すことになっていたので。ケンには身震いするような歓喜をおぼえて枕を抱きしめた。今夜からは……近くの病院に走り込んでくる救急車の悲鳴のようなサイレンや、明け方に突然鳴りだす隣の法律事務所警報に耳をふさぐことはない。深夜に十一回、近くを通過する貨物列車の震動に部屋ごと揺り起こされることもないし、まして、あのいまましい鐘も二度と聞くことはないんだ！ そうは思っても、それがどういうことなのかを理解し、実感を抱くまでには少し時間がかかった。空虚な日々積み重ねがそうした喜びに対する反応を鈍らせていた。彼はゆっくりと上体を起こすと、狭い部屋の中を見まわした。何十回となく塗り変えられた白い壁、安っぽいピンク色のドア、すっかり黄ばんで固くなったビニールのカーテン、木製のうす汚れた机に、ネズミ色のタンス……。それらを見てみると、ケンは自分がこの街で一番ひどい独房に住んでいたような気がした。今さらながらこの部屋に馴染めなかったわけが理解できた。主人が夜遅く仕事から戻ってきて椅子にへたりこんだ時、その疲れをいやすような物はどこにもなかった。すべてが古臭く、冷たい色をしていた。でも、今日でおさらばだ。一時にジェリーが車を持ってきて荷物をのせたら、永久にサヨウナラだ！ ケンは仰向けに寝ころんで天井のシミを見た。この部屋に住んだ何十人もの孤独な主人たちを凝視しつづけてきた二十八個のシミ。彼はいつものように数をかぞえると目をとじた。本当にこの四ヵ月はひどかったなと彼は回顧してみた。キッチンもランドリーもなく、バスルームは他の三人と共同

して使わなければならなかった。月に六十ドルは破格に安かったが、気の休まる場所などどこにもなかった。ケンは目をあけるとベッドの下に手をつこんで、スプリングの間から預金通帳を取り出した。カリフォルニア・ファースト銀行。青い表紙にうたれた金色の活字を食い入るように見てから通帳を開いた。八百四十二ドル十六セント。毎月の生活費を百ドルに切り詰め、いつかこの悲惨な生活から脱出してやるという希望を持ちつづけた成果であった。「今日でおしまいだ」と、彼は声にだして言った。冷たいサンドウィッチ、冷たいミルク、シャワーのお湯を使った吐き気のするインスタント・スूप……。「もうごめんだ。絶対に！」彼は通帳をベッドの下に戻すと、ポケットを探って紙きれを取り出した。

『リバーサイド・アパートメント・ナンバーE』それが、あと二、三時間で彼を迎えてくれる新しい楽園であった。家賃は三倍近いが、当然のごとくその内容はまったく違っていた。ケンはふくみ笑いをしながら両者の完璧なる相違点に思いを馳せた。まず、窓がちがうな。こいつは木製のガタガタだが、むこうのは頑丈なアルミサッシでこぎれいなカーテンもついている。部屋は、そりゃあもう段ちがいだ。大きいのが三つもあって、どれをとってもここの二倍はある。もちろんバスルームはまた別にちゃんとある。おれ専用のだ。これからは順番を待たされたり、隣のホモ野郎のうすら笑いをすることもない。二十四時間、お好きな時になってわけだ。そして、問題はこれだ。自動皿洗い機！こいつが決定的なちがいだ。他にも新品のオーブンとピカピカの流し台が完備してるから、もう、あったかい食事をしたなんて夢も見なくてすむはず

だ。さしずめ今夜は、仲間を呼んで、食って、飲んで、ガーンと騒いでやろう。ジェリーやジョーじや、来たいてやつはみんなオーケーだ。なあに、いくら汚したって心配ご無用だ。自動皿洗い機がばっちり後始末をしてくれるんだから。それから……おっと、これを忘れちゃいけない。テニス・コートとプールのおまけがあるんだ。アパートのマネージャーめ、これらの設備はいつでもご使用になれますなんて言ってたな……。ケンは自分自身に説明するように、それらの有様を思い浮かべた。心は一足先に、この死んだような密室から抜けでていったようだった。すべての違いを再確認すると、彼は痛いほどの充足感が胸に広がってゆくのを感じた。やがてそれはうっとりするような安らぎを導き、彼はまたうとうとと眠りはじめた。

「ケン、あなたに電話よ。そこにいるんでしょう？　まだ寝ているの？　ケン！　起きなさい。早くしないと切れますよー」ミセス・イーガンがドアを激しく叩いた。驚いたケンはむっくりと起きあがり廊下にてた。「なんです？」「電話よって言ったのよ」階段の手摺によりかかりながらミセス・イーガンが言った。彼は階段を駆けおり、踊り場で老婆を追いこして玄関にある電話にとびついた。「もしもし」「ケンか？　ジェリーだ。調子はどうだい？」「すこぶるいいよ。それよりどうかしたのか？」「今朝はさ、ケン、聞いてるか？　今朝は特別のすごい霧でさ」ケンは身をかがめて飾り窓から外をのぞいた。ポーチから先はなにひとつ見えなかった。「ああ、こりゃあひどい霧だな。でもな、ジェリー、今日中に移らなきゃ困るんだよ」「ああ、わかってるさ。

ただ、時間をちょっと遅らせたいんだよ。ちょっと運転するのがヤバくてさ、さっきも買物に行こうとしたんだ——ヨシエとね。でも信号もろくに見えないんだよ」ジェリーの低いためのいきが聞こえた。「わかった。とにかくおれの方は今日中に移れりゃいいんだ」「それじゃあ、三時頃でもいいか？ 少しは良くなってると思うよ」「……そう願いたいな」と彼は言った。「オーケー、三時には必ず行くからな。それじゃ後で」受話器を戻すと、ケンはまだ一度外の様子を眺めた。せっかくの新生活のスタートにケチがついたような気がした。「コーヒーが沸いてるのよ。あなたも飲むでしょう？」そばで電話が終るのを待っていたミセス・イーガンが、にこにこしながら誘いをかけた。ふりかえったケンは苦笑しながらうなずいた。「このとおりの霧でね、引っ越しを少し遅らせますよ」「そう？ その方がいいわね。早く移ってくれなんて意地悪は言いませんよ。さあ、こっちに來て掛けなさい」老婆は笑をうかべて肩を叩いた。ケンは一瞬、その微笑は自分がでてゆくのを喜んでいるものか、それともこれからの生活を励ましているものか戸惑ったが、ともかくも彼女に続いて広々としたキッチンの中のテーブルについた。「ケン、あなたがここに來た時のことを、今、ちょっと思いだしていたのよ」老婆はひとこと言う度に、喉に手をあて、咳払いをした。「ほんとと言うとね、初めはあなたに部屋を貸そうかどうかずいぶん迷ったのよ。だって、あなたはまるで浮浪者みたいに瘦せて、服は汚れていたし、信用できそうにもなかったんですもの……気を悪くしないでね、ケン。でも今はね、やっぱり貸してよかったと思っているのよ」ケンはタバコに火をつけてしげしげと老婆を見た。「ここにはね、タチの悪い連中が多い

でしょう。あなたも今度のことでよくそれがわかったと思うけど。でもね、ここには黒人やメキシコ人のようにろくでもない浮浪者がたくさんいるけど、そればかりがこのアメリカじゃないのよ。わかるわね？」彼女の催促するような眼差につられてケンはずいづいみせた。「わたしはね、外国から来ているあなたのような若い人たちに、この国の本当のいいところを見てほしいのよ。……ああ、そうそう、チキン・パイがあつたんだわ！ ケンも食べるでしょう？ あなたも好きだったわね？」彼が返事をする前に、老婆はヨロヨロとオープンの方に歩きだしていた。ケンは、最後だからと自分に言いきかせてゆったり構えることにした。コーヒートを半分ほど飲んだころ、老婆が小皿にパイをのせて戻ってきた。「ミセス・イーガン。今朝もちょっとあの写真見たんですけどね、あれはやっぱ自筆みたいだなあ。どうして今まで気がつかなかったのか、自分でもふしぎですよ。五十セント玉に縁がないせいかな……」それを聞いた老婆は、待つてましたとばかりに入手経過の復習をはじめた。彼女に言わせると、故ケネディ大統領は典型的な素晴らしいアメリカ人であり、良識ある政治家の鑑であつた。老婆は眼鏡のレンズで大映しにとびでた目を白黒させ、細いしわだらけの腕を左右にふって熱弁をふるつた。しかし、それはケンの耳に入るといつものように素通りしてゆき、時たまもつともらしくうなずくだけだつた。彼は白いシャツと半ズボンをはいて、テニス・コートを手早く走りまわる自分の姿を思い浮かべていた。明るい照明にくっきりとうかんだ夜のテニス・コート。傍では可愛らしい女の子がカウンタをとりながら、時々、ガンバッテネエ！ と黄色い歓声をとばす。なかなかのシーソー・ゲームでコ

トはもりあがってくる。が、結局はちよつとの差でおれが勝つ。試合が終つて快い汗をかいたら、女の子の手をひいてプールに直行だ。……ちよつと待てよ、とケンは思った。プールはまずい。自分は泳げなかったのだと思ひだし、彼は空想を中断して大きなためいきをついた。

「そういうことなのよ、ケン。あの写真にはそんな裏話があるの。わたしは主人の弟のレオナードから聞いたんだけど——彼はそれは紳士的なやさしい人でね。でも十五年前に南米にいた時、クーデターに巻き込まれてね、奥さんと一緒に亡くなつてしまつたのよ。人の運命つて本当にわからないものねえ」ケンは三本目のタバコをもみ消しながら言つた。「ミセス・イーガン、この四カ月はほんとにお世話になりました。ありがとうを言わせてください」老婆は眼鏡をかけ直すと彼の顔をのぞきこんだ。「ケン、ああ、わたしも本当に楽しかつたわよ。こんな老婆ちゃんのとほけた話に、いつもつきあつてくれたんですもの。でもねえ、わたしのことは忘れないでほしいわ——いつまでもなんて言わない。わたしが死ぬまででいいのよ。それまでは覚えていてね」筋張つた細い手が彼の腕を握りしめた。「忘れませんよ」ケンはその手をとつて指にキスをした。「まあ、いやねえこの子つたら！ 年寄りをからかうもんじゃありませんよ」老婆は顔をくずして乾いた笑い声をあげた。「それじゃ、これから買物に行かなきゃいけないんで……」と言つて彼は席を立つた。ミセス・イーガンは口元をゆがめて寂しそうにうなずいた。「元氣でいてね。これから暑くなるから体には氣をつけるのよ」それから老婆はすぐに微笑をとり戻してケンの尻を叩いた。「さあ、行つてらっしゃい！」

玄関のドアをあけて外に出てみると思っていたより寒くはなかった。彼の姿を見て番犬のバスターが合図するように一声吠え、ケンは手をふってそれに答えたが、三步もいかないうちに丸いものに足をとられて転んだ。立ち上がって正体を見きわめるとそれは、大きなオレンジであった。畜生、なんでこんな所にオレンジが落ちてるんだ！ ケンはぶつぶつ言いながら立ち上がってまわりを見まわした。地面には他にも五、六個それらしい物がころがっていた。彼はそれをつづつけりとぼすと歩道に沿って歩きだした。視界は十メートルもなく、通りの角さえ見えなかった。ケンは霧に隠れた建物を確かめるようにあたりを見まわしてオレンジの木を見つけた。なるほど、昨夜の強風でここから飛ばされてきたんだな。すると、この木はこの家の所有物だな。彼は『ウェスタン保険会社』という看板を横目で見た。ケガでもしてりゃあ保険金をとれたのに……。ケンは舌打ちをして通りをわたり、歯科医のオフィスがある角をまがった。前方に赤いサンダーバードが見えてくると、彼は歩調を速めた。車の持ち主は若い白人の男で、この界限では新顔であった。ケンも二、三度道で立ち話をすることがあったが、やつはロス・アンジェルズでヤクの売買をしてがっばり稼いだのだが、マフィアに目をつけられて命からがらこの街に逃げてきた、というのがこの辺のもっぱらの噂であった。その真偽はともかく、若いのに大金を持っていてということ、かなりヤバイ事をやったのだからという一般の意見には、彼も異議はなかった。「おい、なにしてる？」車を見ながら通りすぎようとした時、上の方から太い声がした。う

わさの男が窓から顔をだして通りを見おろしている。「景気はどうだい?」「まあまあさ。今、家を塗り変えてるところだ」男の声は潑刺としていた。「そうらしいな。いい車だよ。おれもこの五七年型が好きなんだ」五、六千ドルはするなとケンはある。調子も最高だぜ。部品は全部新しいのと取り換えたからなあ」「いくらだ?」「値段? 八千だよ。おい、盗まんぐれよな」男はさまあみろという感じで笑ってみせた。ドアに手をかけるとロックされていなかった。「この次にするよ」ケンは車の中をじっくりと眺めまわしてドアをしめた。男も笑いながら窓をしめた。くそったれめ、トラックにぶつかって死んじまえ……小声で吐きすてるようにつぶやくと、彼はまた歩きだした。黒人教会の前に寝ころんでいたアル中の老人が、彼の姿を見て怯えたように門の陰に身を隠した。ケンは左右をみながら小走りでU通りをわたり、コイン・ランドリーと美容院の間を抜けてメキシカン・レストランの裏口にでた。ランチ・タイムだというのにレストランに客はいなかった。テーブルを拭いていたメキシコ人の少年が、入ってきたケンを見てにやっとした。「よう、どうしてる?」とケンがきいた。少年は先週教わったばかりという英語で、フライン、フライン、と言いながら宝石でも磨くようにテーブルをこすりつづけた。表にまわるとジョンがカウンターの中で新聞を読んでいた。

「おい、ケンじゃないか! ひさしぶりだなあ。どうしてる?」メキシコ系のがっしりとした男がおおげさに驚いてみせた。「悪くないよ」「なにを食べる?」「そうだなあ……、ミート・ボール付きのスパゲティがいいな」「飲み物は?」「オレンジ。いや、ルート・ビア(サルサ根やサッラス根などからつく

（清涼飲料）にしよう。氷ぬきでね」ジョンは大声でキッチンにオーダーを告げ、ケンはカウンターにやりかかって待った。人気がないレストランは冬の海辺のように深く沈んでいた。この場所だけが、霧によって街中の笑い声や陽気なおしゃべりから隔離されているようだった。「でも、本当にひさしぶりだなあ。なにかあったのか？」ジョンはタバコをふかしているケンにコーラをついで差しだした。「ああ、わるいな」彼は小さな紙コップをもらうと笑ってみせた。「ちょっとしたトラブルがあつてね。実は今日、引越越するんだよ、近くだけど……」ジョンが興味ありげに身を乗り出してきた時、うすいサングラスをかけた大柄な女がスパゲティをトレイにのせて持ってきた。「いくら？」「二ドル七十五」金を払ってトレイをもらうと、ケンはうしろのテーブルに移った。さきほどの少年が、湯気のたっている皿を鋭い目でちらっと見た。フォークでミート・ボールを刻んでいると、ジョンがカウンターからでてきて向いの椅子に座った。「どうしたんだ？ 話してくれないか？」ジョンと逢ったのは、彼が今日引越すS通りの家にきて間もない頃だった。ケンはサン・フランシスコにいた時分の経験から、頼みもしないのに好意的に話しかけてくる連中はホモだけだ、と決めつけていたのだが、ジョンの場合は違った。それまで逢ったことがなくとも、すでに知り合っているという人間がいる。二人は初めてのオーダーがくる前にすっかりうちつけていた。ジョンは知る必要のあることはすべて心得ている、といったタイプの人間だった。それはかれがダウンタウンに生まれ育つて自然と身につけた生活の術であった。しかし、そんなかれを見ていると、ケンは自分と共通するある種の悲哀感をおぼえた。いかに生活

の術に長けていようと、結局死ぬまでここから抜けだせない人間たちがいる。ジョンもそうした中の一人のように思えたのだ。「四日前のことだけど」とケンは言った。「コミュニティ病院の裏で黒ん坊にからまれてき、掘り出し物の車があるっていうんで、ちょっとそっちの方に行ってみたんだよ。まあ、大丈夫だろうと思ったんだけどね、気がついてみたらあそこはスラムだったんだ——おれは知らなかったんだよ。それでね、こりゃあヤバいと思ったんだけど、運の悪いことにナイフを忘れてきてき——おれの部屋に。そのうち仲間がでてきたんでおれもカンネンしたよ」ケンはミート・ボールを口に放りこんだ。「するとなにかい、そのディヴィサデーロ通りでやられたのか?」「うん、それで早い話が、アパートまでお供して二十ドルとられたってことなんだ」「しかしな、金をとるだけなら自分の部屋までつれてくことはないだろう」「そこなんだよ、問題は! やつはヤクがきれかかっててさ、目が潤んでたんだよ——ヤバいぜ。あんな時にゃあなにをするかわかんないよ。で、おれの考えじゃ、金づるをつかんだところでなんとしても一本射ちたかったんだと思うんだ。やつぱり部屋に入るなり射ちやがったよ、やつこさん」「それで、おまえはなにしてた?」ケンは鼻を鳴らした。「黙って見てたよ。横にニグロの女がきてさ、べったりひっついてんだもの。それで、結局二十ドル寄付して逃げてきたんだよ」「なるほどね……」ケンはポケットからタバコをだし、ジョンに一本すすめた。「ところがだ、家に帰ってもあんまり腹が立つから友だちに電話してぶちまけたんだよ。そしたらそいつが怒って、これは警察にリポートしなきゃだめだって騒ぎだしてね、結局おれもつれてかれて警察で話してきた